

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—」
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)

目 次

新入生の皆さんへ…………… (2)

災害復興支援ボランティアで学んだこと… 水谷 星斗 (4)

手放す勇氣…………… 新井 由貴 (6)

信仰のみ—宗教改革 500 周年 …… 落合 建仁 (10)



新入生の皆さんへ

敬神愛人



(F.C.クライン)

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」
イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを
尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最
も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分の
ように愛しなさい。」

(新約聖書 マタイによる福音書22章36～39節)

名古屋学院大学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。
皆さんは自分で選んだにせよ、大学に選ばれたにせよ、とにかくこの大
学の学生となられたのです。皆さんはこの大学について何をご存知で
しょうか。これからいろいろな機会に聞かれたり、読まれたりされるで
しょうが、ここでも少しお話したいと思います。

☆

私立の学校はそれぞれ独自の理念、「建学の精神」を持って建てられ、
またそれを継承して運営されています。わが名古屋学院大学の「建学の
精神」は「敬神愛人」です。これは前述の新約聖書から引用されました。

人間は神を愛し敬うこと、そして自分を愛するように隣人を愛すること、
この「敬神」と「愛人」を一番大切な掟として守らなければならないとい
う、イエス・キリストの教えです。これは、ただ人と仲良くしなさいとい
うヒューマニズムからだけでなく、神を敬うことによって成立する隣
人愛です。これを教育の基本にしているのです。

☆

1883年、アメリカからフレデリック・チャールズ・クライン(F. C.
Klein) という宣教師がキリスト教の伝道と英語教育を目的として来日
しました。そして横浜に英語学校、教会をつくるなど伝道の成果をあ

げ、彼が次の着任地として妻メアリーとともに名古屋に来たのは1887年
でした。彼らは名古屋に着いたその日から英語の学校を開いたのです。
その「私立愛知英語学校」は「名古屋英和学校」と改称し、これがわが名古
屋学院大学の基となりました。

その時、クライン博士がその教育の基本理念として掲げたのが「敬神
愛人」でした。

☆

新入生の皆さん、皆さんはこれから数年間、この大学の学生として勉
強をしていくことになります。ここでは勉強ばかりでなく、人間を成長
させていくことにも励んでください。

そして私たちは祈っています。「敬神愛人」が示すように、皆さんが自
分を愛するように他者を愛することができますように、また、人間の力
を過信することなく、それをはるかに超えた存在を認める、謙虚な人間
へと成長を遂げることができますように。

◆ チャペルへの招き ◆

チャペルでは週に三回、チャペルアワー、カレッジアワー、オルガンア
ワーと称してキリスト教の礼拝の時間を設けております。聖書を読み、
教職員や近郊の牧師の奨励を聴き、キリスト教の音楽に親しみ、賛美歌
を歌います。大学は決して、皆さんにキリスト教の信仰を持たせようと
考えているわけではありませんが、世界の大きな文化の源流の一つとも
いえるキリスト教に少しでも触れて、何かを感じていただければと考
えております。

<名古屋キャンパス>:チャペルアワー 火曜日12:40～13:10 しろとりチャペル
カレッジアワー 木曜日12:40～13:10 しろとりチャペル
オルガンアワー 月曜日12:40～13:10 しろとりチャペル

<瀬戸キャンパス>:チャペルアワー 金曜日13:00～13:30 瀬戸チャペル
(第1週目の金曜日はカレッジアワーとして実施)

☆

チャペルは原則としていつでも開いています。静かに落ち着きたいとき
はどうぞお気軽にご利用してください。ただし、大声でのおしゃべり、飲食
は禁止です。チャペルの椅子に座り、静かに自分と向き合い、語りかけ、そ
して内なる声に耳を傾けると、新しい導きをそこに見出したり、また何
か発見があるかもしれません。また、チャペルでは宗教講演会やコンサ
ートなどの様々な行事や勉強会などを行っています。

災害復興支援ボランティアで学んだこと

水谷星斗

私はボラセンCWクラブの災害復興支援チームあすなろに所属しています。あすなろは6年前に起きた東日本大震災や1年前に起きた熊本地震の被害に遭われた現地へ行き、そのニーズに合ったボランティア活動をしています。それから、NPO法人や社会福祉協議会、他大学の方の助けにより幅広い活動も行っています。また名古屋で防災に関する活動や、今年の7月に起きた九州の豪雨など急な災害に駆けつけるなどの活動もしています。最近では、東北学院大学と共同でボランティア活動をすることもあります。私は熊本と東北と九州豪雨のボランティア活動に参加しました。

熊本では主にフィールドワークをして、どれぐらいの被害があったのか、どういう場所が壊れたのかなどを学びました。それから東海大学の学生さんに語り場を開いてもらい、実際体験された被害の話を聴きました。東海大学の学生さんから学んだことは、こういう言い方は不適切かもしれないかもしれませんが、震度7にしては死者が少なかったということです。な

ぜ被害が少なかったかといいますが、地域のコミュニティの繋がりが強かったからだということでした。そのため、この家の人は就職活動で留守にしている、ここはお年寄りが住んでいるから早く探さないといけないなどがわかり、点呼が早くとれたため被害が少なく済んだということでした。いつかこの東海地域にも南海トラフ地震がくるといわれています。今、私たちができることは地域の繋がりを強くすることだと思います。まずは近所の人に挨拶をするところから始めてみたいかがでしょうか。

九州豪雨の被害があったところへは第一陣のボランティアで行きました。主に泥かきなどをしました。正直雨の被害なんてたいしたことないと思っていました。しかし、思ったよりも酷い被害でした。20名ほどで1軒の家を担当したのですが、20人も居るのだから1日あれば半分は終わるのかなと思っていましたが、実際丸一日泥かきの作業をしたのですが1割も終わらなかったです。本当に被害の大きかったものでした。こう

して私たちがボランティアに行っただけで活動したのですが、こういったボランティアがなければどうなっていたのだろうかと思案すると怖くなりました。

東北での活動は、東北学院大学の学生さん、中央大学、志学館大学の学生さんなど、いろいろな大学の学生がボランティアに来ていました。そこでは私と同じ学生と関わるが多かったので、学生さんから教わることが多くありました。これまで私は、現地の方から何かを貰うことに抵抗がありました。しかし、ボランティアをされる側はボランティアに

きてもらったことで生まれた温かい気持ちをどうしたらいいのか、どこで恩返しをしたらいいのか悩むそうです。なので、現地の方から「ボランティアありがとうございます。」と仮に差し入れをいただいたとしたら、きちんと受け取って、お互いがいい思いをするような、持ちつ持たれつ関係を築くことがボランティアの本物の形なのだと思案することができました。私がボランティアに行き学んだことを、発信し準備することによって、いつかくるといわれている南海トラフ地震に備えられれば良いなと思案しました。

(みずたに しょうと 現代社会学部学生 2017.11.2 カレッジアワー奨励)



手放す勇気

新井由貴

イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

(新約聖書 マルコによる福音書10章17～22節)

マルコによる福音書には「ある人」と書いてありますが、他の福音書には、富める青年あるいは議員と書かれています。その彼が走り寄ってひざまずいてと聖書に書いてありますように、彼が熱心に何かを求めていたということは、この走り寄ってひざまずいてという表現から想像できます。この若い青年はいわゆるエリート的なコースを歩んでいた者で

す。節度ある家に育ち、前途有望な富める役人でありました。彼は幼い頃からユダヤ社会の律法に従って、ちゃんと教育を受け、それらを守ってきました。しかし、なお何かが足りない、自分に欠けているものがある、そういう思いがしてイエス様のもとにひざまずき、「先生、永遠の命を受け継ぐには何をすれば」と問うたのであります。

多くの人たちは、何か良いものをもって自分が称賛されることを望みます。時には謙遜して辞退する人もいますけれど、しかしその人が本当に良いものが実際に自分から取り去られると、やはり残念に思います。「あなたは素晴らしい、普通の人ではこんなことできませんよ」と言われ、「いや、とんでもありません、私はまだまだダメな人間です」と謙遜しても、その時に相手が「そうですね、確かにあなたはまだまだですね」と、もし言ったとしたら、その人は心の中で腹を立てるでしょう。人はたえず自分の中に良いもの、誇りというものをもちたいのです。

しかしここでイエス様は一切の良いものを、栄光を、誇りを神様に返しなさい、そう言われます。この富める青年の心の中には、自分がたとえ完全でないにしても、普通の人よりは良いものがあると自負していたでしょう。イエス様はその彼の心を見抜いて、青年の本来の質問に答える前にあえて神様の前に自分には誇るべきものがある、良いものがあると誇ることでできる者は一人もいないことを指摘されるのです。そして青年の本来の質問にイエス様は答えます。その答えというのは青年にとっては予想外の期待外れの答えでした。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽

証するな、奪い取るな、父母を敬え』。ここに記されていることは有名なモーセの十戒であります。モーセの十戒は彼が小さい頃から繰り返し聞かされてきました。ですから「先生そういうことはみな、こどもの時から守っています」と答えます。この青年にとってモーセの十戒はわかりきったこと、私たちからみれば信仰のABCというか、入門でありました。またこれはクリスチャンにとってみると、教会に行きなさい、聖書を読みなさい、お祈りしなさいということですよ。そんなことはわかっている。そんなことを聞きにきたのではない。そういう思いが青年のうちにありました。でもここで考えたいのは、彼は神様の掟、律法を本当に守ってきたらどうかということです。

イエス様は「殺すな」というのは兄弟に対して怒る者、愚か者と言う者、バカと言う者は相手を殺しているんだ、心の中であんな奴いなければいいと思う時、もうそれは相手を殺していると言われます。イエス様は単なる形式ではなく、私たちの心の中深くに問うておられるのです。「姦淫するな」も色情を抱いて見る、そのような者はすでに姦淫したと言われます。「盗むな」というのも単に人の所有物に手を出さない、欲しがらないというだけではなく、積極的に他

人の所有物を保護するという意味もあって、だから貧しい者の犠牲の上に富める者がいるならばそれも盗みの一つということになるのです。この富んでいた青年の富というものは、本当に正当な利益だろうか。その背景には貧しい人々の苦しみがあるのです。そのように、この『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』ということを通じた形式的なもの、律法的なものとしてだけでなく、心の深いところにとらえていくなれば、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言えるだろうかと問われているのです。

イエス様の戒めは単なる形式や表現ではありません。ですからこの青年は自らがそれを完全に守れないと、そのことをまず告白するべきでした。しかし彼にはそういう謙遜がありませんでした。自分のことを本当に正しく深く見つめることのできないこの彼に対して、イエス様は慈しんで言われます。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っているものを売り払い、貧しい人々に施しなさい」イエス様は彼をしっかりと、慈しみ、愛の目をもって、しかし慈しみ愛の目であるがゆえにその語る言葉は厳しいものでした。イエス様はここで彼に富の放棄を命じま

した。そして彼は命じられていることが何であるかを知り、自分にはそれができないことを感じて去って行きます。

「あなたに欠けているものが一つある」今まで彼はいろいろとやってきたでしょう。それでも何か足りない。永遠の命を得るためにはまだ足りない。イエス様のところに行けばそれが何かわかるのではないかとやって来ました。今までいろいろ積んで得てきた。それでも足りないからさらにもう一つという形で彼はやってきたのです。しかし、イエス様から見れば、実は彼に足りない一つというのは、さらに足りない一つではなく、今まで得てきたものを捨てなさいという放棄でありました。得ることではなく放棄、捨てることをイエス様は彼に命じたのです。彼は去って行きました。彼の望みは切実でしたが、はかない出会いでありました。しかし彼はそうまでして出会ったイエス様をその後も忘れることができなかつたのです。数か月の後、あのエルサレムのゴルゴタの丘で処刑されたイエスという一人の男のことを彼は後で知ります。あなたの持っているものを全て捨てなさいと自分に言ったイエス様が自ら一番大切な命を十字架の上で捨てられたことを彼は後で知るのでした。

私たちはこの世のありとあらゆる富に心を奪われます。それは束の間であることも知らず、まだ足りない、さらに大きくしよう、得よう、積み上げようと夢中になります。そしていつの間にか、他者を押しつけ、傷つけそして自分自身まで傷つけていることに気付かないでいるのです。そのような私たちに対してイエス様は十字架に架かることによって本当の命、永遠の命というのは得るところからではなく、むしろ捨てることによって初めて得ることができるという信仰の逆説の真理をここに示してくださいました。得よう、得ようとするのではなく、むしろ神様の前に全てを投げ出す、明け渡すところから私たちは本当の大切なものを、本当の永遠の命を得ることができるのではないのでしょうか。

では私たちはみんな今持っている自分の所有物を全て放棄しなければならぬのでしょうか。あのアッシジの聖フランチェスコのように、家も富も家庭も全て捨てて、修道僧のような生活をしなければならないのでしょうか。必ずしもそういう受け取りかたをする必要はありません

。それは別の表現を使うと、神様の前での方向転換、価値転換であります。神様の前に自分の持っているものを全て投げ出し、放棄し、それらを全て神様からいただくのです。当たり前のように与えられている自分の命も家族も学力も財産も全てが自分で得たものではなく、実は考えていきますと、与えられているもの全てが神様から与えられているものであることを私たちは気づくことができます。その全てを神様に明け渡し据え直す。それは私たち自身ではとても難しいことです。しかしイエス様の助けによって、神様に全てを明け渡すことができた時、私たちは自分中心・エゴから解放され、持っている富、能力を自分のためだけでなく、隣人のため、また神様のために使っていただくことができるのではないのでしょうか。本当の命、永遠の命は足りない何かを加えるのではなく、神様の前に自分の持っているもの全てを捨て、明け渡し、そして受け止めなおすところから始まるのであります。必要ならば捨てる、献げることも私たちは勇気をもって実行したいと心から願います。

(あらい ゆき 在日大韓キリスト教会名古屋教会副牧師 2017.11.14 チャペルアワー奨励)

信仰のみ一宗教改革500周年

落合建仁

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

(新約聖書 ローマの信徒への手紙1章16～17節)

毎年10月31日はプロテスタント諸教会では宗教改革記念日として祝われ、あるいは覚えられています。今から500年前の1517年10月31日、マルティン・ルター(1483～1546)が95か条の提題という文書で当時のローマ・カトリック教会に問題提起を行い、その結果名古屋学院大学のルーツでもあるプロテスタント教会が生まれる、そのきっかけとなりました。今年(2017年)であり、その宗教改革からちょうど500年が経ちます。よって今年(2017年)は世界各地で記念行事が行われ、また今日はちょうど10月31日であり、奨励題に宗教

改革という言葉をつけたのはそうした理由によります。

さて、その宗教改革が起きた背景ですが、いくつもの要因があるものの、やはり次の2点は見逃すことができないと思います。一つは、当時のカトリック教会が贖宥状、いわゆる免罪符を発行していたことです。これは、人は死んだ後、皆善人ではないので一直線に天国に行くことはできない。そこで死後、天国へ行くか地獄へ行くかの待機場所として煉獄と呼ばれる中間地帯があり、そこは清められる場で、炎で焼かれ苦しむ場所であり、その煉獄を脱するた

めには、地上で生きている間には償いきれなかった罪の償いをしなければならぬ。それは嫌だということで、償いを免除してもらうために購入したのが贖宥状です。これは多くの人にとっては、お金でお札を買えば天国へ行けるという理解に繋がりました。もちろん、教会の利益において多くの利権が絡んでいたことはいふまでもありません。

そして、宗教改革の起きたもう一つの理由はルターの内面です。ルターもまた善人でありたい、死後苦しむたくない、そのために善い行いをと日々さまざまな努力をするのですが、どんなに頑張っても不十分だ、自分は神様の罰を受けるに違いないと苦しんでいました。心の平安が得られなかったのです。けれどもルターが聖書を読みこんでいった時——当時は一般の人たちの識字率は良くありませんでしたし、そもそも印刷された聖書もほとんどない、それどころか一般の聖職者・神父さえ聖書の中身を十分に知らなかった時代——そういった時にルターが聖書を読み込んでいった時、今日読んだ聖書の言葉に出会って驚くのです。17

節の言葉、「福音には神の義が啓示されていますが、それは初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。正しい者は信仰によって生きると書いてある通りです」と。義とは、正義の義、正しいという意味なので、神の義とは、神様に正しいとされる・良しとされるという意味です。自分の努力やお金を払うことによって義とされるのではなく、すでに神様によってよしとされている、それをただ感謝の内に信じて受け止めることが何よりも大切だ——この発見に驚いたルターがふと当時の世界を見渡しますと、そこには先ほどの贖宥状を買い求める人々の姿がありました。でも聖書には元来そのような勧めは何も書かれていない。それでルターは95か条の提題によって問題提起をし、それが宗教改革の発端となったのでした。

さて、この、当時の社会背景、そしてルターの内面、この二つが交差して宗教改革の発端が生じたということができるとは思います。この二つ共に根っこの部分で共通しているはなんであるかということ、それは〈死〉です。死ぬということの本

当に怖がっていた。突然死んでしまっただけは罪の償いが不十分で煉獄で苦しんでしまう、神に裁かれて地獄へ行ってしまう、そのことを真剣に恐れていたということです。当時は時折流行するペストといった病気により、大量の人たちが突然死んでしまうことがありました。当時の人たちにとって死はとても身近なものでありました。そこで思うことがあります。現在2017年の日本に生きる私たちは、当時の人たちとは死を巡っては、あまりにも環境が違うということです。学生の年齢ですと祖父祖母が亡くなって、死ということをはぼんやり考えて、ふと死んだらどうなるのだろうと怖く感じることはあったとしても、お札を買ってまで地獄の苦しみから免れようという地獄の恐怖のリアリティーはこんにちもう、ほとんどないと思います。そうした時にどうしても問題となるのが、かつての宗教改革のきっかけとなった問題意識を、こんにちを生きる私たちも果たして共有できるのかという問題です。事実私がここまで宗教改革のことを話し、これを聴いて眠くなってきている人もいるで

しょう。それは当然です。そんな昔の話と、今の自分と関係のないことにしか聞こえませんから。ルターは信仰によって義とされることを喜びましたが、こんにちを生きる私たちはもはや死後の地獄を空想としか思えないからルターの喜びを共有することができません。では共有できるとすれば何を共有するのか、これは皆さんだけではなく、実は私自身にとっても大きな問でした。

そうした時、1年ほど前ですが私の出身校である、東京神学大学の学長（当時）であられる芳賀力先生が書かれた、宗教改革の今日的意義についての文章に強い印象を与えました（「一六世紀の改革と二一世紀の私たち」、『改革長老教会協議会ニュース』第76号、2016年12月）。それはどういうものかというところ、フランスの哲学者サルトル（1905～80）の言葉を引用して、〈21世紀の人間は死後の地獄を恐れることはなくなった。しかし、21世紀はたとえば、他人という存在、その他人という地上の地獄を恐れているのではないか〉という問題提起から始まるものでした。他人という地上の地獄、

実はさきほどの神の義といった時の義とは義認、それは英語ではジャスティフィケーションという言葉でもあり、それは正当化するとか承認するという意味もあります。そしてそこから人間という存在は常に他者からの承認を求めて苦しんでいる存在ではないかと問うのです。

例えば、私たちは人に評価してもらえないとつらくなります。勉強も仕事も評価を正当になされないと落ち込みます。SNS上ではいかに評価されるかの世界で満ちています。場合によっては他者との比較で嫉妬し、憧れの人を真似たいと願う——例えば美しい体を手に入れたいと願う——でも結果肉体的に精神的に無理がたたるとつらくなります。それを見聞きする側がつらくなるくらいですから、本人のつらさは想像を絶するものがあります。そして少し達成しても、もっと美しくもっとこれが欲しいと際限のない欲求が次から次へと沸き起こる。正にどれもこれも承認を求めながらも、誰一人心の平安を得られていない、救いの確信を得られていない状態です。そしてもう一つは、人は、自分で自分を承認しな

いでは生きられない存在だということです。人は誰でも人生に失敗や過ち、後悔があり、何度も思い返しては苦しみます。その時人は、それは仕方のないことだったのだと言い聞かせ、自分で自分を慰めようとしません。それは自分の歩んできた人生を、それは正しかったのだと肯定し正当化することです。でもまたふと時が経つと、これで良かったのかと悩む。今言ったどれも共通しているのが、自分の努力によって他人に承認してもらいたい、あるいは自分の力で自分を正当化する、いずれも自分の努力で自分を受け入れようとする、救われようとする自己義認の姿です。これはまさに、あの、善い行いをした贖宥状を買って、そのように努力して神様に認められて死後の平安を得ようということと、生きている間か死んだ後かその違いはあるかもしれませんが、根っこの部分は同じです。死後か今かの違いがあっても苦しみの根っこは同じ。そしてその努力は自己義認によっては結局、完全な心の平安、永遠の平安はいつまでも得られない、深い闇が広がっている点も共通しているのです。

ここに宗教改革の500年も前の昔と、現代の共通の問題意識が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。と同時にそれは、ルターが500年も前に見出した真理が、2017年のこんにちを生きる私たちにとっても変わらず救いとなるということでもあります。ルターが発見した真理、それは、神様は罪や欠けある私たちであっても、その私たちを神様は主イエス・キリストの十字架によって罪を赦してくださっている、私たちは存在の根本において神様によって承認されている。そのことを信じる大切さです。この大きな大きな承認

(おちあい けんじ 金城学院大学文学部宗教主事 2017.10.31 チャペルアワー奨励)

に置かれているということを知るとき、私たちはこんにちの地上の地獄、つまり他者からの承認、自分で自分を承認しきれない際限ない不安から救い出されるのだと思います。あなたはすでに神様による承認のうちにおかれている。ただあなたはそれを信頼して感謝のうちに喜ぶ、受け入れるだけでいいのだ——現代社会に支配的な価値や基準、業に対する評価によってではない、神様による義認によって生きる。一人一人の新しい人生は、この恵み・福音をただ信じ、信頼し、受け入れるところから始まります。

